



「世界一大きな絵」プロジェクト主宰
特定非営利活動法人アース・アイデンティティー・プロジェクト代表

河原 裕子^{さん}



長年に亘り国際支援活動や平和推進活動が続けている河原さん。おっとりした外見と裏腹に、ひとたび目標を定めると不屈の精神と行動力をもって、不可能に思えるようなことを実現させていく人です。

今回は多岐にわたる河原さんの活動のうち、「世界一大きな絵」プロジェクトを中心に話を伺いました。

類いまれなリーダーシップで世界を舞台に万を超える人を組織化し、あまたの困難を克服しながら「世界一大きな絵」を作り上げるさまは圧巻です。

聞き手・構成：野間 自子

—— 河原さんはNPO法人アース・アイデンティティー・プロジェクトの代表理事でいらっしゃいますが、どういう活動を行っていますか。

世界中の大使館などを通じて、「世界一大きな絵」という1×5メートルの布5枚に子どもたちが絵を描き、母親が縫い合わせて1枚の大きな絵にしています。日本では市区町村の長にお願いして各市区町村で作らせていただいています。「世界一大きな絵」プロジェクトは今年30周年を迎えます。

またスリー・ゼロ・クラブ（3ZERO Club）に協力させていただいています。

—— 3ZERO Clubとは。

3ZERO Clubとは、ノーベル平和賞受賞者のムハマド・ユヌス博士が提唱されている「3つのゼロの世界の実現」に向けた新しい取り組みです。3つのゼロの世界、CO₂純排出量ゼロ、富の集中がもたらしてきた貧困ゼロ、そして、人々の内なる起業家精神を解き放ち、失業ゼロにする世界経済を目指しています。

—— こういった活動をされる前、河原さんは何をされてましたか。

主婦でした。1970年にアフリカ各地やネパールを巡

るツアーに参加したのですが、そこで出会った人と結婚しました（笑）。結婚して16年間、一生懸命夫の両親に尽くしました。その間、様々な国の人をホームステイで受け入れてきました。その中にバングラデシュ人民共和国の方がいて、「僕の国にどうぞ」と言ってくれたので両親を看取った後、行きました。

——それが1986年ですね。

最初は観光で、この国の隅々まで回りました。その間、ホームステイでうちに来ていた人の一族が外務大臣などになり、親しくなった常宿のホテル内のブティックのマダムの父親が外務大臣や国会議長などに就任されました。結果、偶然にもこの国の上層部の方々と面識を得ることになりました。

——1991年に雲母の海（きららのかい）を作られましたね。

20万人もの人が亡くなったサイクロンの時に現場に行ったのですが、レスキュー隊が空から落としていった薬や物資を村長さんたちが横流ししたり、あってもちゃんと使えていなかったりしていました。その酷い状態を目の当たりにして、これは自分で何かしなくちゃいけないと思っちゃったんですよ。それでこの会を始めました。翌年、バングラデシュ総理府NGO局で外国NGOとして認可を得て正式なNGOになりました。バングラデシュでは、調和＝ハーモニーを象徴する数字が6で、それを3つも付けてあげたよといわれました。キリスト教的には、えっと思う数字ですが、この国として素晴らしいのをくださったんだと思い、ありがたく認可番号666番をいただきました。

会の名称は、天上の世界は、「煌めく」キラキラしたイメージで、「海」は7つの海で、世界が天上の世界のようになりますようにという思いを込めました。

——1999年に「アース・アイデンティティ・プロジェクト」、その後、2020年に現在の「アース・アイデンティティー・プロジェクト」と名称を変更されましたね。

現在の名称は、グラフィックデザイナーの稲吉紘実さんが名付けてくださいました。子どもたちが描いた絵には子どもたちの夢や希望や様々な想いが入っている、これが全部1枚になると地球のアイデンティティーである、と考えられたみたい。そして「プロジェクト」。「ト」だと止まるんですって、それで「ツ」。私は舌を

噛みそうになるんですけど。

——活動開始は。

北ベンガルのクリグラムという最貧地区です。皆はダッカあたりで小さくやればいいと言ってくれましたが、それなら誰でもやるし、やる意味がないからと思いました。私は何も分からない人なものですから、いちばん貧しいところでやると言っちゃったんですね。

——まずどういう活動をしましたか。

助成金で牛とかヤギとか魚とかを購入して貸し出しました。「雲母の海クリグラム開発計画」です。例えば牛を一頭貸し出す、翌年に子どもが生まれて、その翌年にも生まれる。その次の年に、真ん中に生まれた牛を貸出先にそのまま置いて、貸した牛と生まれた牛1頭を利息として回収する、という形の援助です。気の遠くなるような話なんですけどヤギだともっと早く生まれるので同じような感じで、ヤギだとか、種だとか、10人1グループとして広げていきました。

——組織化が大変だったのでは。

こういう地域にはまず戸籍とかないので、私が現地に行って、各家を回って、家族構成、予防接種の有無とか、いろいろなことを聞いて、まず実態を把握しました。そして次にリーダー150人を育てました。3年ぐらいは何にも外から見えない感じで、とにかくこつこつ組織づくりを行いました。そのリーダーがあちこちの村に行って、メンバーを勧誘し、10人1グループをたくさん作っていったのです。

——その地域の生活は向上しましたか。

だんだん牛とかヤギとか普及していった、生活が向上していきました。日本から牛を250頭あげるといって人がいて、ビジャス大統領に来てもらったこともあります。そんな貧しいところに普通、大統領は来ないのですが、大統領が来ると、国のテレビで放映されるんですよ。それで大統領にお願いしたら「そんなこと言われたの初めてだ」って、だから行くと言ってくれました。大統領は1000人以上の兵隊さんを連れて、ヘリコプターでいらっしゃいました。各家の屋根にみんなライフルを持った兵隊さんがいて。日本の大使に「あなた勝手に来てとか言うけど、あれ、誰のお金で来ていると思うん

ですか、国のお金で来ているんですよ、あなた一円も払ってないでしょう」とすごく怒られました。

—— 1996年に稲吉さんが子どもたちに絵を描かせたいとおっしゃったそうですね。

はい。この地域は貧しく子どもたちは学校に行けず、多くの大人も絵はおろか文字も書いたことがなかったんです。だから、私は、この機会にできる限りたくさん子どもたちに絵を描いてもらいたいと思いました。最終的には、1万3000人の子どもが参加して100メートル四方の「世界一大きな絵」になりました。1m×10mに布を切って1000枚。ここに描いた絵を縫い合わせました。

—— これが最初の「世界一大きな絵」ですね。よくそんなたくさん子どもたちが集まりましたね。

雲母の海にお母さんが1万人くらいいたわけですよ。そのお母さんの子どもはもっといたので、「1人のお母さんに1人の子ども」でやりたいと150人のリーダーに頼みました。その1人のリーダーが10とか15のグループを持っていて、1グループ10人なので、それだけで十分な数になりました。

乗り物はないからみんなどんな形でもいいから歩いて来てくれと。場所は、雨季は海のような川。でも、乾季は広い砂原みたいところを選びました。皆が近づいてきたとき、映画『アラビアのロレンス』みたいに地平線がゆらゆらとして、向こうからざっざっと来る様子が印象的でした。皆、裸足で、中には6時間以上も歩いてきた子もいました。

—— 材料はどうされたんですか。

ペンキ、布、糸、筆などを調達しました。稲吉さんをはじめ篤志家の方が費用を出してくれました。

ただ、資材が前日まで何も届かなかったんです。私は楽観的なので、最悪みんな手をたたいて歌って踊って終わりにしましょうかと言ったんですよ。そうしたら稲吉さんが嫌だ、絶対やりたいと言うので、夜中ずっと村々を走って走って大騒ぎして明け方までに何とか資材をかき集めました。

—— 大人数が集まるため、準備も大変そうです。

まずトイレを掘り、飲み水用の井戸を掘りました。

そして2万食、お母さんたちが作りました。もう大騒ぎでした。明け方に13時間かけてお召し列車に乗った国会議長が到着されました。国会議長をお迎えに行くというときに、なんと元々の資材が届いたんですよ。でも結局、夜中にかき集めたものを使いました。

—— その場で絵を描いた。

子どもたちは、あっという間、15分ぐらいで絵を描きました。一番安いコインとか、魚とか、象みたいなものとか、日本とバングラデシュの国旗だとか。布の上にみんな座って。絵を描くのが生まれて初めての子も大勢いました。

—— 仕上げは。

お母さんたちの手で、次の日に縫い合わせました。1時間ぐらいで。

その翌年には2000人の子どもを対象とした最初歩教育プログラムを開始しました。

—— その後、一大プロジェクトになりましたね。

誰かがどこかで話したのか、その後連絡があり、「世界一大きな絵1998 “ピースピース in 広島”」をやりました。800人ぐらいの子どもが5メートル×5メートルの布に絵を描きましたが、子どもに「あなた、どれを描いたか分かる？」と聞くとちゃんと分かるんですよ。みんな喜んで一生懸命描いていました。

そのうち賛同者も増えて、私も頑張ってやらなくちゃということで「世界一大きな絵」大使館版、「世界一大きな絵」47都道府県版などと広がって、今では100か国以上の大使館、300以上の日本の市区町村が参加するプロジェクトに成長しました。

—— ユニセフの最高責任者が「共通の喜びを分かち合い、平和に対する意識を育てる活動」とおっしゃったそうですね。

私は子どもたちが楽しく描いてくれることが平和そのものだと思います。

例えば、初めはみんなよそよそしい感じなのが、そのうち「あんた、緑ちょうだい、私、赤あげる」とか補い合う。最初はばらばらだけど、だんだん大きく全体を見られるようになって、「じゃあ、私これを描くから、あんたはこれを描けば」とか協力し合う。子どもたちが自分で考えていくようになるんです。喜びや平

和って、そういう子どもたちの様子そのものにあるんじゃないかと感じます。

—— 去年は大阪・関西万博で展示されましたね。

EXPO アリーナのフェスティバル・ステーションで5日間、安倍元総理ゆかりのエジプト日本学校（エジプト・日本教育パートナーシップの協力の下、学級会、給食当番、清掃などを取り入れたエジプト国内の公立学校）で制作されたエジプトの絵55枚、日本の絵47（都道府県）、その他海外の国の絵13を展示しました。風がすごいので、全国のおみこしの関係者800人の方に手伝ってもらい、1個20キロもする250個のブロックを置きました。この「世界一大きな絵EXPO 2025」の企画は展示のわずか1カ月前に決まりましたが、約120人のボランティアが短時間で縫い合わせてくれました。万博のアリーナでの展示は皆の夢だったので大喜びでやってくれました。すごくいい思い出になったとも言っていました。私自身は、現場では一生懸命で、あとから「うわっ。すごいことやれたんだな」と思いました。

—— 辛かったことは。

活動ではないです。ただ、私、2001年12月に、末期の卵巣がん余命4カ月の宣告を受けました。死を覚悟しましたが、摘出手術後、最後のお正月を自宅で迎えたいと嘘を言って退院し、薬を全部捨ててバングラデシュに飛びました。そのまま病院に戻らず一生懸命仕事しているうちに今に至っています。

—— 嬉しかったことは。

子どもが描いてお母さん方が縫う。やっている皆が本当に感動するんですよ。そのとき私はやった感じがすごいです。1人の力は知れているけど100人集まったらこんな大きい絵ができたとか。バングラデシュの奥地で、誰も知らないようなところの子でも世界一大きな絵が描けたとかね。

自分の絵の隣にはアフリカの絵とかがあって。その子どもたちは初めは知らないんですよ、アフリカのどこその町とか。でも覚えちゃうわけですよ。そして関心を持ち、話題がグローバルになっていくんです。絵を1個だけ描いただけなんだけど、それによって世界という視野ができたり、他国の子どもたちに関心が

生じ、みんな同じなんだということが分かったり。私はそれがとても嬉しいんです。

—— 30年も続けていらっしゃるんですが、その情熱はどこから出てくるのですか

今日やめなさいと言われてたら、今日、やめて大丈夫。執着しているわけではなく、いつ終わってもいいと思ってやっています。情熱というより、毎日、終わったらすべて100年前ぐらいの話になっちゃう、という日々の連続です。一瞬、一瞬で生きている感じ。

—— 描いた絵はどうしていますか。

全て大切に保存しています。全部、畳めるんですよ。

—— すごい量でしょう。

500枚くらいあります。茨城県境町の方で保管してくださってます。また境町のふるさと納税に「世界一大きな絵」平和活動という項目を入れてくださることになったのです。境町は小さいけれど素晴らしい町で、私たちの活動も境町の皆様に随分助けられています。

—— 弁護士とかかわったことはありますか。

プロジェクトの事務局長に小切手を悪用され大変困ったことがあるのですが、日本の弁護士さんに解決してもらいました。

本当に素晴らしい方でした。普通、こういう案件は自分の下の弁護士にやってもらっただけで無償だから僕がやらなきゃならない、でもやるからには絶対に負けるわけにいかないとおっしゃって一生懸命にやってくさいました。お洒落な弁護士さんで、法廷での丁々発止のやり取りはまるで映画のワンシーンのようでした。それで私は勝ったんですよ。弁護士さんのおかげで私は助かりました。その弁護士さんから「もう絶対、もう二度とNGOなんかするんじゃないよ」と諭されて。でもまだやっていますけど（笑）。

プロフィール かわはら・ひろこ

1986年からバングラデシュに滞在、最貧地区の女性の自立生活支援活動に携わる。1996年に女性たちの子ども1万3000人が布に描いた絵を縫い合わせ1枚の大きな絵とした活動が評価され、現地で外国NGOを設立。1999年アース・アイデンティティ・プロジェクトに改称し、(その後、2020年にアース・アイデンティティ・プロジェクトに改称)2005年東京都の認証を得た。以降、世界各国また国内で、また国際イベントにて「世界一大きな絵」制作を通じた社会啓発と平和貢献へのメッセージを発信し続けている。